

# 金 塚 古 墳

高圧送電線鉄塔改修に伴なう  
発掘調査報告

1 9 7 8

掛川市教育委員会

文 化 係

# 墳 古 塚 金

高田正徳氏所蔵に伴う  
調査報告

東京市教育委員会

# 金 塚 古 墳

高圧送電線鉄塔改修に伴なう  
発掘調査報告

1 9 7 8

掛 川 市 教 育 委 員 会

# 金 塚 古 蹟

高松市教育委員会  
古蹟調査部

掛川市教育委員会

## 序

社会経済の発展とともに電力需要も多様化の途をたどり、それに伴ない電力施設などの保全改修工事が各所で  
行なわれております。

このようななかで、掛川市内は勿論のこと静岡県下に於ても代表的な前方後円墳と云っても過言でない、掛川市各和地内にある金塚古墳の前方部に敷されている高圧送電線鉄塔の改修工事が計画された為、その用地内の一部分の調査を実施することになりました。

調査は文化財保護の趣旨を尊重されて中部電力株式会社の全面的援助のもとに行なわれ、埴輪棺・埴輪列が発見され、貴重な成果を得ました。

調査にあたり高圧線下での御援助と指導をいただいた中部電力株式会社静岡支店および同浜松電力所をはじめ、土地所有者の方々のご協力に対し心から感謝の意を表します。

本書の刊行にあたって文化財に関心のある方々に活用されれば幸甚であります。

昭和53年3月31日

掛川市教育委員会  
教育長 佐藤正夫

## 例 言

1. 本書は昭和52年7月1日から昭和53年3月31日まで行なわれた掛川市各和地内の金塚古墳に敷施されている鉄塔用地内の調査報告である。

2. 発掘調査は中部電力株式会社静岡支店及び同浜松電力所の全面的援助を得て掛川市教育委員会が実施した。

3. 発掘調査団の構成は次のとおりである。

調査計画者 中部電力株式会社 静岡支店

調査主体者 掛川市教育委員会

担当者 岩井 克 允

補助員 内 藤 次 郎・船 木 健・大 場 満 明

野 口 英 生・杉 山 良 好・榛 葉 樹 由

松 本 行 弘・中 村 隆 行・岩 井 和 志

岩 井 正 治・石 山 一 宏

4. 本書の執筆は岩井が行ない、中村・岩井(正)が補佐した。掲載した写真は岩井が撮影したものである。

5. 図面整理は岩井が行ない、野口・中村・岩井(正)が補佐した。

6. 編集は岩井が行なった。

7. 調査にあたって土地所有者の岡山基平・萩田俊一・萩田祐平・萩田延太郎・萩田松平・萩田鉄太郎・小島兼作・萩田順平氏など多くの方々にご協力いただいた。

## 目 次

|       |             |    |
|-------|-------------|----|
| 第 1 章 | 位置と環境       | 7  |
| 第 2 章 | 経 過         | 11 |
|       | 1. 調査に至る経過  | 11 |
|       | 2. 調査経過     | 11 |
| 第 3 章 | 調査の概要       | 13 |
|       | 1. 墳丘測量     | 13 |
|       | 2. 周囲の古墳    | 13 |
|       | 3. 外部施設について | 14 |
|       | 4. トレンチの観察  | 14 |
| 第 4 章 | 遺構および遺物     | 18 |
|       | 1. 埴輪棺      | 18 |
|       | 2. 埴輪列      | 21 |
|       | 3. 土 埴      | 22 |
| 第 5 章 | ま と め       | 23 |

# 挿 図 目 次

|         |                 |    |
|---------|-----------------|----|
| 挿 図 第 1 | 金塚古墳位置及び周辺遺跡図   | 9  |
| 第 2     | 金塚古墳周辺環境図       | 10 |
| 第 3     | 金塚古墳墳丘測量図       | 15 |
| 第 4     | 金塚古墳トレンチ設定図     | 16 |
| 第 5     | 金塚古墳トレンチA断面図    | 16 |
| 第 6     | 金塚古墳トレンチB断面図    | 16 |
| 第 7     | 金塚古墳遺構及び遺物出土状態図 | 19 |
| 第 8     | 金塚古墳埴輪棺実測図      | 19 |
| 第 9     | 金塚古墳埴輪実測図       | 20 |
| 第 10    | 金塚古墳土坑実測図       | 22 |
| 表 1     | 金塚古墳円筒埴輪計測一覧表   | 21 |

# 図 版 目 次

|          |                       |
|----------|-----------------------|
| 図 版 I    | A 遠 景 (西から)           |
|          | B 遠 景 (東から)           |
| 図 版 II   | A 改修工事開始前の前方部 (西から)   |
|          | B 改修工事終了後の前方部 (南から)   |
| 図 版 III  | A 前方部東側から後円部を望む (南から) |
|          | B 前方部西側から後円部を望む (南から) |
| 図 版 IV   | A 後円部東側から前方部を望む (東から) |
|          | B 後円部西側から前方部を望む (北から) |
| 図 版 V    | A 後円部東側裾部 (北から)       |
|          | B 後円部北側裾部と金塚2号 (東から)  |
| 図 版 VI   | A 後円部北東側裾部 (南から)      |
|          | B 後円部西側裾部 (北から)       |
| 図 版 VII  | A 金塚1号 (北から)          |
|          | B 金塚2号 (北西から)         |
| 図 版 VIII | A 金塚3号 (北東から)         |
|          | B 金塚4号 (北から)          |
| 図 版 IX   | A 埴 輪 棺 (北から) 右       |
|          | B 埴輪棺内部 (北から) 左       |
| 図 版 X    | A 埴輪棺掘り方 (北から) 右      |
|          | B 土 坑 (東から) 左         |
| 図 版 XI   | A 埴輪棺掘り方 (左)・土坑 (右)   |
|          | B 埴 輪 列               |
| 図 版 XII  | 出土した埴輪                |

## 第1章 位置と環境

掛川市内を東西に通過する国道一号の大池地内から、北西に分岐している県道40号・掛川―天竜線を3kmほど進み、富部地内で国鉄二俣線の二反田踏切を渡り、西に向かって坂道を登ると岡津原にでる。この台地を西に向かって進み、市道原川一各和線を横切り原野谷川を渡って坂道を約200m登ると各和原段丘が広がっている。金塚古墳はこの段丘を登りつめる20mほど手前の左側に位置している。地籍は掛川市各和字金塚1892―1・1892―3・1892―4である。

古墳周辺の地形をみると、掛川市の北方、八高山の麓から発する原野谷川が多くの開折谷や河岸段丘を形成しながら流下し、本郷地内でその流れを南に変えている。この地域から南にかけては幅0.5kmから1kmの沖積地や左岸の本郷地区、右岸の和田岡地区には河岸段丘が形成されている。金塚古墳は原野谷川の右岸で、海拔約54mの低位の各和原段丘に沿って南北にのびる稜線上に位置し、和田岡古墳群を形成している一つである。古墳北方の吉岡地域は海拔44mから58mほどの河岸段丘となり、また東方でも海拔38m前後の河岸段丘の残丘である岡津原が望まれる。

つぎに周辺遺跡についてながめてみると、原野谷川流域には縄文時代をはじめとして各時代の遺跡の分布していることが知られている(註1)。このなかでも古墳時代についてみると、原野谷川右岸では原田地区の萩ノ段古墳・神明山古墳・寺島古墳群などが分布し、和田岡地区では、吉岡原の東縁から500mなかほどには全長約52mの帆立貝式の前方後円墳の大塚古墳がある(註2)。墳丘は段築構造であり、周溝をめぐらし、埴輪が認められる古墳で、5世紀前半のものとみられている。また大塚古墳から東へ約500m離れた原野谷川とその沖積平野をのぞむ段丘の縁には、直径30m、高さ5mほどの春林院古墳がある。墳丘には帯状に2段に葺石をめぐらし、主体部が粘土椀の5世紀の前半とみられる古墳である(註3)。このほか周辺には高田行人塚古墳など4基の古墳が点在している。高田原段丘東縁には明治30年代の発掘により主体部が粘土椀で、鏡2面・勾玉・管玉などが出土し、5世紀前半とみられる全長約60mの前方後円墳の瓢箪古墳(註4)が、その北約250mのところには後円部径約30mの前方後円墳とみられる行人塚古墳をはじめ18基にのぼる小円墳が点在している。吉岡原段丘上には金塚古墳をはじめ、金塚古墳から南へ約1km離れたところには永原寺古墳群や山下横穴群が所在している。各和原段丘の袋井市側には前方後円墳の権現山古墳や、宇佐八幡神社古墳などのほか、大規模な菅ヶ谷横穴群が分布している。

次に原野谷川の左岸の掛川市本郷から南の細谷地区にかけての古墳時代の遺跡をみると、昭和20年代に発掘し横穴式石室を持ち馬具などが出土した長福寺古墳をはじめ、既に消滅



したが石室を造らしていた前城原古墳、宮坂古墳群、堂山古墳群、枕田古墳群などの円墳群とともに長福寺下横穴群、宮坂横穴群、古銭横穴群(註5)、桶ヶ谷横穴群などの大規模な横穴が分布している。また鉄鉾・鉄剣などが出土し、5世紀に位置づけられている高代山古墳群(註6)、更に南側の岡津原古墳には神明塚古墳・岡津八幡神社古墳群や、既に削平されているが前方後円墳ではないかと推定され、半円方格帯神獸鏡が出土した奥ノ原古墳(註7)がある。そして岡津原残丘の南縁には西岡津古墳(註8)、向上古墳群(註9)、岡津横穴群A群・B群(註10)が所在している。更に南方の逆川左岸の掛川市領家から高御所にかけて本村古墳群、本村横穴群(註11)などが分布している。そしてこれらの東側の掛川市下俣地区には石棺が刳り貫き式であり、半円方格帯変形四神四獸鏡・金銅装単龍環頭式飾大刀・銀装円頭式飾大刀・金銅装馬具・須恵器などが出土した宇洞ヶ谷横穴、金銅装馬具・鉄鏃・直刀などの実戦用武器類・須恵器などが出土している山麓横穴が所在する。いずれも単独で造られており、6世紀中頃まで遡るものとみられている。この外原野谷川と倉真川との間の丘陵地帯や逆川流域にも多くの古墳・横穴が分布している。

註1 「静岡県埋蔵文化財包蔵地名表」 昭和40年 静岡県教育委員会

註2 「静岡県史」第一巻 昭和5年 静岡県

註3 「春林院古墳」 昭和41年 春林院古墳調査委員会

註4 註1

註5 註1及び昭和53年2月掛川市教育委員会発見

註6 「高代山古墳群」 昭和49年 掛川市教育委員会

註7 註2

註8 「東名高速道路(静岡県内工事)関係埋蔵文化財発掘調査報告書」

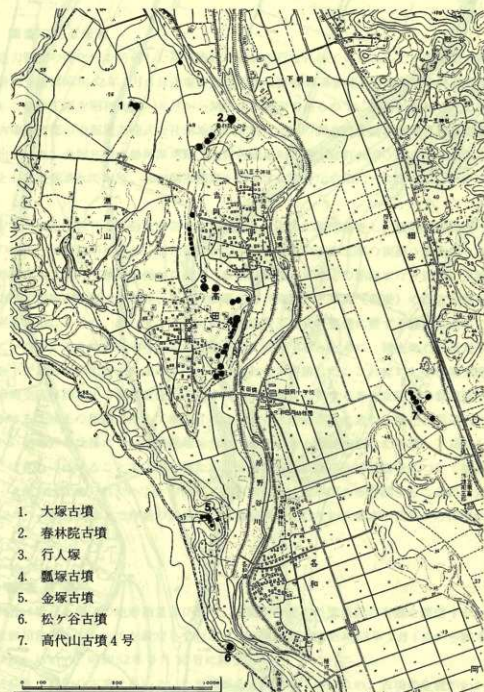
1968年 静岡県教育委員会・日本道路公団・掛川市教育委員会

註9 同上

註10 同上

註11 同上

註12 「宇洞ヶ谷横穴発掘調査報告書」 昭和43年 掛川市教育委員会



挿図第1 金塚古墳位置及び周辺遺跡図



## 第2章 経 過

### 1. 調査に至る経過

電力需要の変化と老朽化した送電施設の改修が行なわれているなかで、中部電力株式会社静岡支店は昭和52年3月8日送電線磐田西掛川線第44番鉄塔を袋井市側の鉄塔移築と関連して改修工事を昭和52年10月から開始する予定であるので、鉄塔が敷設されている金塚古墳前方部の中部電力株式会社用地内の埋蔵文化財の調査の要請が掛川市教育委員会に提出された。金塚古墳は静岡県埋蔵文化財包蔵地地名表(昭和40年)にも№1183各和金塚として記載されており、和田岡古墳群を形成する重要な古墳の一つであることが知られている。

そこで掛川市教育委員会は中部電力株式会社とともに現地踏査し、鉄塔改修計画の際、他の場所への移転が可能か、また移転ができない場合の改修工事の規模、工法ならびに調査時期などについて協議を重ねた結果、鉄塔移転は不可能との結論になり送電に支障のない方法で用地内北側は用地界、南側は鉄塔A脚(南西)とD脚(南東)の以北の事前調査を実施することとし、あわせてそれに要する経費及び資料整理に要する経費について負担していただくよう中部電力株式会社静岡支店に要請するとともに、調査地点が送電中の鉄塔直下であるため工務上の指導についてもあわせて要請した。これに対し中部電力株式会社静岡支店は掛川市の事情を充分考慮され、事前調査に要する多大な経費の負担及び線下における工務上の指導について承諾された。一方、地形測量に当たり墳丘と周辺の古墳の周りの雑木等の伐採について鉄塔用地外の土地所有者と現地協議した結果、下刈りを出るだけきれいにすることで了解を得たが、古墳西側傾斜面の土地所有者について要請したが「下刈りは止められたい」との回答であり断念し、地形図から作図することにした。昭和52年7月1日墳丘上で作業の無事を祈る墓前供養を行ない、雑木の伐採から作業に入った。

### 2. 調査経過

調査は墳丘と周辺の地形測量及び基石、埴輪列などの外部施設の有無を確認するため鉄塔改修用地内にトレンチを設定して行なった。現地調査は昭和52年7月1日から雑木などの伐採から始め、昭和52年9月30日に終了した。

墳丘及び周辺の古墳は長いあいだ管理がとどこおっていたため、古墳の全貌がわからないほど生い繁った雑木やシダ類などの伐採を蚊や蜂に悩まされながら実施した。伐採作業のなかばにきて後円部北東部に墳丘ではないかとみられる地盤や、前方部東側下方に墳丘が発見されたので道路まで伐採し、測量に支障のないよう整理し運び出した。



挿図第2 金塚古墳周辺環境図

### 第3章 調査の概要

次に墳丘及び周辺の古墳を含めた地形測量を行なうことになり、後円部に中心点を求め、これを基準にして前方部に向かって中軸線を設定した。水準点では金塚古墳から東方へ約3km離れた細谷地内に設置してある一等水準点26.7mから測ることにして、往復3回の平均値を求め、後円部及び前方部、古墳の周辺に設定した。

測量は等高線単位50cmを基準として必要に応じて25cm、1mなどの単位で後円部から開始した。墳丘は後円部の周りに数箇所見られる小盗掘穴、昭和48年の墳頂部盗掘穴、前方部西側礎線部の崩落部や鉄塔敷施による前方部前縁の変容などのほかは原形をよく保っていた。続いて後円部北西裾に位置する金塚2号の測量を行なった。墳頂部には大きな盗掘穴がみられた。続いて雑木伐採中に後円部北東下方でみつかった地盤の測量を行なった。このあと前方部の南側に位置する金塚1号の測量に入った。これも金塚2号と同様に盗掘されていた。

金塚古墳と周辺の古墳と墓の測量を終り周辺の地形測量に移った。古墳の西側は測量に支障となる雑木の伐採を土地所有者から断られたので、掛川市発行の地形図から作図することにした。墳丘の東側傾斜面の状態は良く整っていた。前方部東側下方の墓地の上部で伐採中に発見した墳丘の測量を行なったが、墳頂には地山までもぐった大きな盗掘穴がみられた。このあと道路までの測量を行ない他は地形図を利用することにして測量を終った。松林の中での測量であり測量器材の移動も数多く大変な状況で測量であった。

発掘調査は前方部の南側に敷施されている7万ボルトの送電鉄塔直下の調査であり、しかも台風襲来シーズン中のことから鉄塔に影響を及ぼさないよう特に注意を払いながら行なった。

調査は用地内のなかでも南側鉄塔と脚以北に極ることとし、墓石等の存在が確認されれば止め、それ以上の調査は行なわないこととして用地内北側境界線の東西方向にトレンチAとこれに鉄塔脚間中央で直交するトレンチBを設定して開始した。

トレンチAのなかほどから埴輪が発見されたため、トレンチを南側に50cmの幅で掘り上げたところ、埴輪棺が南北方向に埋葬されていた。そして埴輪棺の西側に土坑1基が発掘された。続いてトレンチBを掘り進めたところ、昭和5年代に敷施した鉄塔脚部の掘り方であったが、土層調査を済ませた。

つぎに鉄塔改修用地内に埴輪列などの外部施設を確認するため、南側鉄塔2脚以北からトレンチAまで表土を除去して調査を行なった。かつての鉄塔敷工事による掘起しにより表土は変容されていたが、埴輪列の一部分を東縁と南縁で確認することができた。このようにして発掘・実測・写真撮影を済ませたのち埋戻しを行ない、総ての現地調査を終了した。

#### 1. 墳丘測量

金塚古墳は各和原段丘から東側に派生し、ほぼ並行して南北150mほどの稜線を利用して周囲の土地を切り削り、あるいは盛土して造られ、原野谷川流域の沖積平野を望むところに位置している。北側は開折されて水田がひらけ、西側は台地との間で開折谷となり、古墳の南側の谷間に続いている。

古墳の現状は鉄塔用地を除いた外はすべて松林となっている。昭和5年代の送電鉄塔敷施による前方部の一部変容、昭和48年代後円部墳頂の盗掘、小盗掘のほかは全体の遺存状態は良好で築造時の姿をよくとどめている。

墳丘測量は古墳の西側から下方の谷間にかけてはとり止め、北側、南側、東側道路までを縮尺100分の1により平板測量で行なった。古墳の位置及び標高については、古墳から3km東方にある一等水準点26.7mから求めた。

古墳は中軸線を北北西から南南東におき、前方部を南南東に向けている。標高は60.5mで、東方の水田との比高は36mを計った。

後円部については、墳頂部に標高60mの等高線が周っていることにより、これを基準に等高線単位50cmで測量を開始した。標高60mより下位の等高線は後円部に於ては墳頂縁から裾部に至るまで小規模の盗掘跡があるものの遺存状態は良好であった。

後円部裾部には幅4m前後の平坦な帯が周らされており、2段築成部分かもしれない。そして帯の外側の北西側と北東側には幅5mほどの周溝とみられる部分を確認した。

前方部は鉄塔敷施による最頂部と前縁の変形、南西隅部の崩落による変貌がみられるほかは遺存状態は良好であった。

このように金塚古墳の規模は墳丘長66.5m、後円部径51m、後円部高さ55m、前方部幅95m、前方部高さ6.5m、後円部帯4m、周溝幅5mを計った。これら結果に基づいての古墳の築造企画については今後調査に期待したい。

#### 2. 周囲の古墳

金塚古墳周辺には過去における調査では、陪塚として静岡県遺跡地名表に2基が記載されているが、今回測量する機会を得た周囲の古墳2基の外に新たに発見された墳丘1基と地蔵れ1ヶ所についてその概要を説明する。

##### 1) 金塚1号

金塚古墳前方部の裾部から南へ11m離れたところに位置する。方墳ではないかと遺跡地



名表に記載されているものである。外見上の観察では方墳にみえるが、流土や裾部の一部変形もあるため、円墳とみるのが妥当ではなかろうか。墳頂部には盗掘穴がみられた。標高56.1mで、規模は径14m、高さ1.6mであった。

## 2) 金塚2号

金塚古墳北西裾部から3mほど離れたところに位置する。墳丘の北側は道路により削り取られており、墳頂部には大きな盗掘穴がみられた。標高56.2mで、規模は直径8m、高さ1.3mであった。

金塚古墳1号及び2号と金塚古墳との築造時期の前後関係については将来の調査にゆずりたい。

## 3) 金塚3号

前方面東側下方の標高41m附近に発見されたものである。墳頂部は地山を深くえぐるように掘り上げた盗掘穴がみられた。墳丘は金塚1号などとは異なり、稜線裾部を削って造られていた。附近には江戸時代初期まで遡る墓地群があるので、古墳よりも、むしろ経塚の可能性もある。

## 4) 金塚4号

金塚古墳後門部北東側で発見された地蔵で、旧道路に接している北側は崩落もみられ、古墳になり得るが今後の精査を待つことにしたい。

## 3. 外部施設について

先述のように、稜線上に造られている金塚古墳には後門部裾に幅4mほどの平坦な帯が周らされている。そして後門部北西側と北東部には幅5m～6m、深さ1mの周溝状部分は主尾根から派生した枝尾根を分断しており、周溝とみるのが妥当である。

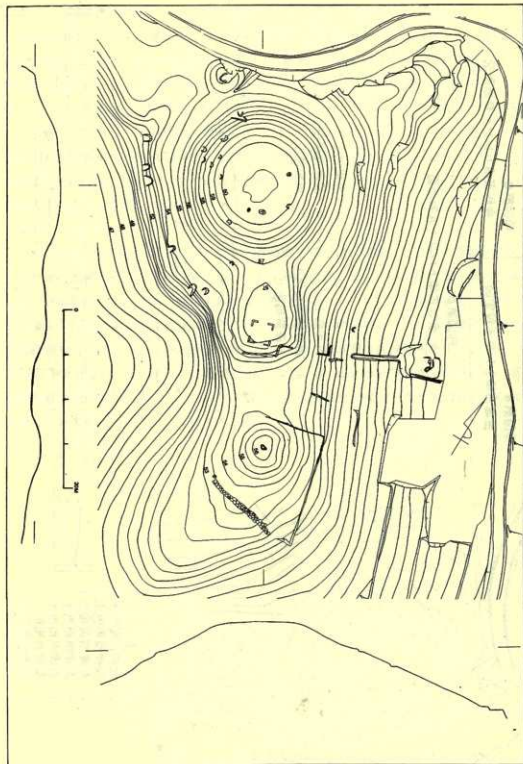
葦石については、外面観察によると、墳丘のところどころに露出していることから、前方面・後門部とも全面に敷かれているとみられる。

## 4. トレンチの視察

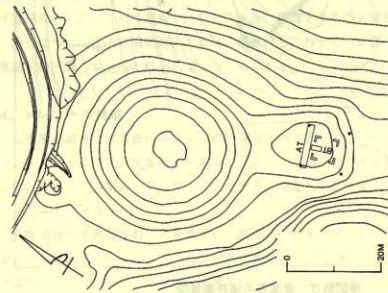
この度の調査は前方面の前半部分の鉄塔用地内に限られ、しかも送電中の調査であるので、トレンチは用地北側境界沿いに東西に一本と、これと直交する南北トレンチ一本を設定した。トレンチは東西トレンチをトレンチA、南北トレンチをトレンチBと呼称する。

### 1) トレンチA

鉄塔用地内北側境界沿いに長さ9m、幅1mの規模で設定したトレンチである。発掘のなかばに埴輪棺の出土により、両側の鉄塔脚側へ50cm拡張して発掘を続けた。高圧電流を送電中のことでもあり、鉄塔脚に影響を及ぼさないように、トレンチの東端および西端か



挿図第3 金塚古墳墳丘測量図



挿図第4  
金塚古墳トレンチ設置図

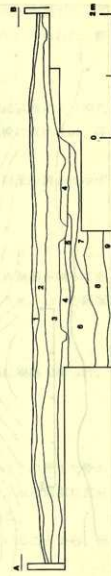
挿図第6  
金塚古墳トレンチB断面図

挿図第5  
金塚古墳トレンチA断面図

1. 表土
2. 黄褐色土
3. 混礫暗黄褐色土
4. 混礫黄褐色土
5. 黒褐色土
6. 混礫暗黄褐色土
7. 黒褐色土



1. 表土
2. 混礫暗黄褐色土
3. 混礫暗黄褐色土
4. 混礫暗黄褐色土
5. 混礫暗黄褐色土
6. 混礫暗黄褐色土
7. 混礫暗黄褐色土
8. 混礫暗黄褐色土
9. 混礫暗黄褐色土



らトレンチの中央部に向かって階段状に掘り下げて土層の観察を行なった。

断面観察によると第1層は表土層で黄褐色を呈し、厚さは4~10cmを計った。第2層は混礫黄褐色土で10~25cmの厚さにみられ、西端部は鉄塔脚敷土により攪乱が著しかった。第3層は混礫黄褐色土で10~25cmの盛土がみられた。第4層は混礫暗黄褐色土で10cm前後みられ、この土層に埴輪棺や土坑がみられた。埴輪棺の下部には混礫暗褐色土が第5層として盛られていた。第6層は混礫淡褐色土で10~50cm前後みられた。第7層はトレンチ東側に混礫黄褐色土がみられた。第8層は混礫暗褐色土で20~30cm前後みられた。第9層は地表から1.2mほど下部で黒褐色有機土である。このことから、前方部は盛土して築かれていることが判った。

## 2) トレンチB

トレンチAの中央から直交するように、鉄塔脚の間を南に設定した。鉄塔脚間のため、トレンチの規模は長さ2.4m・幅1mとした。断面観察によると第1層は表土層で、厚さ10~15cm堆積していたが、鉄塔敷土により攪乱が著しかった。第2層は黄褐色土で、15cm前後みられた。第3層は混礫黄褐色土で、15cm前後の埋土であった。第4層はやわらかい混礫黄褐色土で、40~60cm前後の埋土であった。第5層は混礫黒褐色土で、10~15cm前後の埋土であった。第6層は混礫黄褐色土で、15~20cm前後の埋土であった。第7層は黒褐色土が不規則にみられた。第7層の下部は黒褐色有機土となり地山面とみられる部分で、地表からの深さは1.2mであった。

## 第4章 遺構と遺物

調査により発掘された遺構は埴輪棺1、土埴1、埴輪列である。これらについて、簡単に述べることにする。

### 1. 埴輪棺

埴輪棺は前方部のなかほどの地表から45cmの深さのところで混雑褐色有機土層を掘り込んで、中軸線をN-25°Eに向けて埋葬されていた。そして埴輪棺の上面は小礫を含む黄褐色砂層で被われていた。埴輪棺の平面形は楕円形を呈していた。規模は全長70cm、最も広い部分の径25cmを計り、朝顔型埴輪を本体として、別個体の埴輪2個体で構成されていた。埴輪棺の本体となる上部構造は、本体下部と接続するものを用い、透し穴を棺の上面に位置するようにおき、その上に別個体の埴輪を重ねていた。棺の下部のうち内側は上面の埴輪と同一個体であるが、その外側は別個体の埴輪を重ねて造られていた。両小口部のうち北側の小口は円筒埴輪を半載したものをあてて、透し穴が北側になるように用いていた。南側小口は本体とは別個体の埴輪と拳大の川原石を併せて用いたとみられるが、送電線アース敷設の際、破壊されており明らかにすることはできなかった。

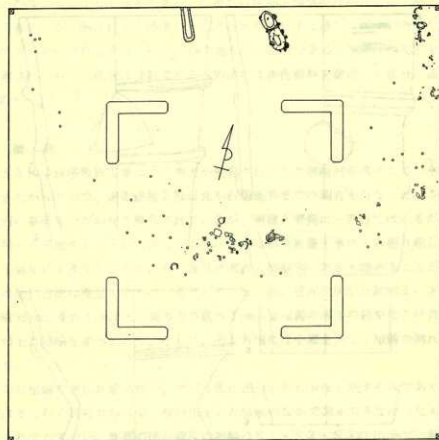
埴輪棺の掘り方の規模は全長89cm、幅24~32cmで、深さは13cmであった。棺本体の底は棺に用いられた朝顔型埴輪の頸部が安定するように少し高くつくられていた。このような掘り方のため棺の遺存状態は土圧による割れと、アース敷設による南側小口の破壊のほかは比較的良好であった。

埴輪棺の内部には埴輪の割れの間隙から流れこんだ封土が詰っており、人骨や副葬品は遺存していなかった。しかし、有機質で遺存しにくい副葬品があったとしてもそれらを納めるための棺の容量はあまり広くはなかった。埴輪棺に使用された埴輪は3個体で、いずれも破片であった。

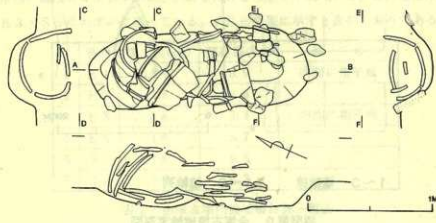
1) は棺の北側小口部に使用されたものである。残存高25cm、口縁部径26cm、器厚1~1.6cmを計る。器面には2条の凸帯があり、凸帯間には径6.4cmの不整円形を呈する透し穴がある。色調は赤褐色を呈し、胎土は精選されており、焼成は比較的良好である。器面には赤色原料を塗布した部分が認められる(挿図第9-1)。

2) は本体の南側と上面外側に用いられたものである。残存高30cm、径26cm、器厚1.1~1.6cmを計る。器面には2条の凸帯がある。凸帯間には底辺8.6cm、斜辺8.3cmの三角形を呈する透し穴がある。色調は赤褐色を呈し、胎土は精選され、焼成は良好である。器面には赤色原料を塗布した部分が認められる(挿図第9-2)。

3) は、本体に使用された朝顔型埴輪である。残存高40cm、口縁部径30cm、頸部の径

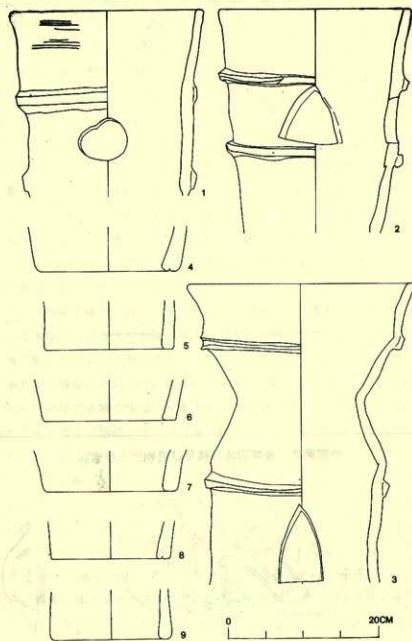


挿図第7 金塚古墳遺構及び遺物出土状態図



挿図第8 金塚古墳埴輪棺実測図





1～3 埋輪棺 4～9 埋輪列

挿図第9 金塚古墳埋輪実測図

17.6 cm、器厚 0.8～1.6 cm ほどである。凸帯が口縁部と頸部のなかほどに1条と胴部に1条つけられている。胴部にある凸帯の下には三角形を呈する透し穴が3箇所あり、そのうち計測できたものは底辺6 cm、斜辺10 cmの透し穴1箇所である。色調は赤褐色を呈し、胎土は精選されており、焼成は良好である。器面には赤色顔料を塗布した部分が認められる(挿図第9-3)。

## 2. 埋輪列

昭和5年代の鉄塔敷施工により地表が変容されており埋輪列が残存しているかどうか予想できなかった。南側鉄塔2脚以北から用地界までの調査を行なった。これによると埋輪列の基底部分がかなり攪乱されているが、南側と東側に一部ではあるが、ほぼ原位置を保って発掘することができた。西側に於ては鉄塔敷施工による掘り起しのため、少量の小破片にすぎなかったが、その散乱状態から埋輪列の存在を確認することができた。

埋輪の配列方法は攪乱もありはっきりしていないが、遺存状態が比較的良好なところを見ると、幅35 cm、深さ6 cmほどの掘り方の底へ1 cm～2 cm程度の厚さの砂を含んだ黄褐色土を敷きその上に埋輪を並べていた。そして、その外側には小溝をあてて埋輪の倒れるのを防いでいた。

出土した埋輪の遺存状態は悪く、すべて底の部分から6 cmほど残すのみであり、種類についてはまったく判らなかった。今回出土した埋輪のなかで図示できなかったものについて若干ふれておきたい。底部の径が最少の埋輪はS1・S2・S3の16 cmで、最大のものはE3・E5の18 cmである。

埋輪の色調は淡赤褐色を呈し、焼成はあまり良くなく、器面は剥落が著しいため荒れている。整形の跡はW4がかすかにとどめる外はまったく不明である。器内面には指圧痕がE1・E3・S5にわずかに残っている。これらを表に示すと次のとおりである。

| 番号    | 底 径(cm) | 残存高(cm) | 備 考    |
|-------|---------|---------|--------|
| 1 E 1 | 17      | 6.9     | 内面に指圧痕 |
| 2 E 2 | 17      | 6.6     |        |
| 3 E 3 | 18      | 5.4     | 内面に指圧痕 |
| 4 E 5 | 18      | 5.7     |        |
| 5 S 1 | 16      | 5.5     |        |
| 6 S 2 | 16      | 6.7     |        |

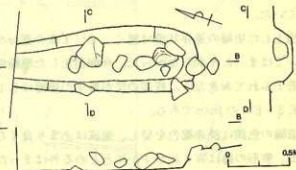
表1 金塚古墳円筒埋輪計測一覧表

### 3. 土 壇

土壇は埴輪棺から西へ1.4 m離れた、地表から45 cmの深さのところ、混雑黄褐色土層を掘り込んで造られていた。今回の調査では遺構の一部が用地外におよんでいるため、その全貌を明らかにすることはできなかったが、調査し得たところによると、土壇は埴輪棺とは並行して造られているものとみられた。土壇の平面形は隅丸長方形を呈し、その規模は長軸160 cm、幅52 cm、深さ20 cmであった。土壇の内部には数細な炭化物を多く含んだ黒色有機土が詰っていた。そして、底面から5 cmほど浮いた状態で拳大の川原石が5個遺存していた。土壇は埴輪棺とはほぼ同じ高さに造られており、中軸線も埴輪棺とはほぼ並行していたことから、葬送儀礼と関係あるものではないだろうか。

なお、埴輪棺から東へ55 cm離れた地表から45 cmほどの深さのところにも、やはり土壇の南端部とみられる部分を観察することができた。しかし、全体が用地外のため調査はできなかった。

挿図第10  
金塚古墳土壇実測図



| 項目   | 測定値  | 単位             | 備考 |
|------|------|----------------|----|
| 全長   | 160  | cm             |    |
| 幅    | 52   | cm             |    |
| 深さ   | 20   | cm             |    |
| 底面面積 | 8.32 | m <sup>2</sup> |    |
| 容積   | 1.66 | m <sup>3</sup> |    |
| 土質   | 黄褐色土 |                |    |
| 炭化物  | 数個   |                |    |
| 川原石  | 5個   |                |    |

## 第5章 ま と め

金塚古墳は瓢箪古墳、大塚古墳と並んで、和田岡古墳群を形成する重要な前方後円墳である。このたびの調査は金塚古墳全体からみれば、ほんの一部にすぎないが、金塚古墳全体及び周囲の古墳のほかに、新たに墳丘が発見された。また、古墳を含む地形測量が電力会社側の協力によりとなったこと、さらに埴輪棺の発見や埴輪棺の遺存状態は極端に悪いものであったが、確認できたことは成果であった。

このような調査結果と過去において出土した遺物から金塚古墳が古式の様相を呈している特徴を示すと思われる点について列挙し、まとめとし、今後の調査を期待したい。

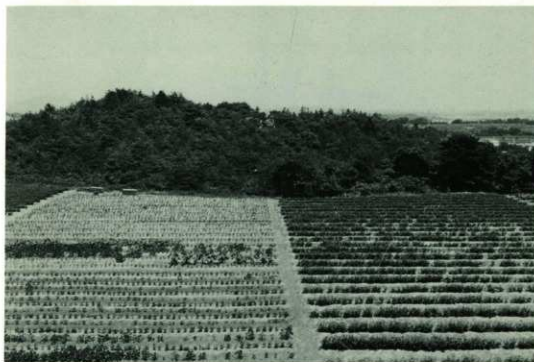
- ① 金塚古墳の立地は低段丘の縁から舌状に派生した稜線を利用して造られており、一般的に古代古墳の占地のあり方といえることができる。
- ② 外形測量の結果、一部分、鉄塔などにより変形しているが、金塚古墳の規模は全長66.5 m、後円部径51.5 m、後円部高6.5 m、前方部幅24 m、前方部高2.6 mを計った。そして前方部は尾根を削り盛土して築かれていた。
- ③ 外部施設として
  - イ) 葦石が墳丘全体に施されているものとみられる。
  - ロ) 埴輪列が発掘されたことから、古墳全体に埴輪円筒列が周らされていたとみられる。
  - ハ) 後円部裾部の外側に幅4 mほどの平坦な帯が周らされている。
- ニ) そして、後円部を囲ぐる帯の外側に部分的ではあるが、周溝とみられる部分が認められる。
- ④ 発掘により朝顔型円筒埴輪列およびそれを使用した埴輪棺が出土している。
- ⑤ 昭和48年代に後円部中央部分を発掘された際その規模を確認したところによると、主体部は川原石による堅穴式石室であった(註1)。
- ⑥ そして、掘り上げられた封土中及びその附近から肩底付青、草綴三角板短甲、鉄剣、直刀、鉄斧、石製模造品が採集されている(註1)。

このようなことから本墳の年代については今後の調査を待つことにして軽々しく判断できないが、これらは金塚古墳が古墳時代中期前半、5世紀前半の早い時期に築造された特徴をもっていることとみてよいであろう。最後に金塚古墳の性格について若干ふれてみると、本墳は和田岡古墳群のなかで台地の縁に占地する瓢箪古墳、台地のなかほどに占地する大塚古墳、半円方格帯神獸紋が出土し、台地の縁に占地する奥ノ原古墳とともに原野谷川流

域を支配した首長墓であるということが推定できる。なかでも金塚古墳は、これらのなかで最も古く、5世紀の早い時期、即ち、この地域の古墳の発展段階に集かれた首長墓といえることができる。

註 1 岩井克允 1974 各和金塚古墳について「水垂二ツ池古墳群」付載  
掛川市教育委員会

## 図版 I



遠景（西から）



遠景（東から）



図版 II



改修工事開始前の前方部（西から）



改修工事終了後の前方部（南から）



図版 III



前方部東側から後円部を望む（南から）



前方部西側から後円部を望む（南から）

図版 IV



後円部東側から前方部を望む（東から）



後円部西側から前方部を望む（北西から）

図版 V



後円部東側裾部（北から）



後円部北側裾部と金塚2号（東から）

図版 VI



後円部北東側裾部（南から）



後円部西側裾部（北から）



図版 VII



金塚1号 (北から)



金塚2号 (北西から)



金塚3号 (北東から)



金塚4号 (北から)

図版 IX



壇輪棺（北から）



壇輪棺内部（北から）

図版 X



埴輪棺掘り方（北から）



土 塚（東から）

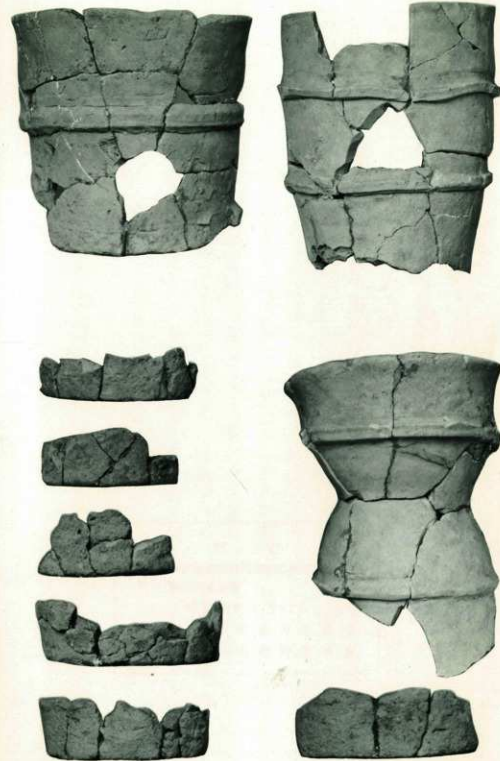




埴輪棺掘り方(左) 土 埴(右)



埴輪 列



出土した埴輪

金 塚 古 墳

高圧送電線鉄塔改修に伴なう

発掘調査報告

昭和53年3月31日

編集 掛川市教育委員会

発行 掛川市教育委員会





